

内藤本「良中子神医天真」読解作業の事後報告

2018年3月8日 石渡氏の主宰する研究会で報告 東條榮喜

(1) “神医天真諸巻”の発現に伴う、「内藤本」捉え直しの必要性

2004年12月の農文協「増補版」による、内藤本『良中子神医天真』の読解の当時に比べて、2011年末に新たに早稲田大学蔵本『良中子神医天真』が発見された事で、現在は「神医天真」を冠した稿本は京大本『神医天真論』と併せて三冊になり、更にまだ未発現分も残っていると推定できるようになった。“神医天真諸巻”というコンセプトのもとで、新たに内藤本を捉え直す必要性が生まれたのである。

- a) 農文協版では、『神医天真』巻と『大序巻』の関係にかなり拘る一方で、稿本『自然真営道』の他の医学諸巻との関連についての関心が薄かった。しかし『神医天真』諸巻が三冊以上ということになると、『神医天真』諸巻の相互関係および稿本『自然真営道』との総体的な連関についての捉え直しが不可避となる。
- b) 農文協版では内藤本に対して簡単すぎて実質的な総合解説になっていない「解説」を載せる一方で、二人の担当者が転体論と医学論の分野から詳細な付属論考を付している。細かい議論が書かれたが、全体を見据えた鳥瞰力のある指摘がなく、問題点も整理しきれていない。
- c) 組版の読みづらさ——技術的な事ではあるが、本文の読み下しと注釈の頁が離れていて読みにくい上に稿本の各頁と読み下し文の頁の対応付けも（表記はされてはいるが）見づらい。

こうした諸点を検討して、筆者はここに新たに、内藤本の読解作業をし直す必要性を感じ、作業を遂行した。特にc)に関しては、写本の各頁と一対一に対応させた読み下し版組を行い、同頁に注釈も載せたので、農文協『増補版』の組み方よりも遙かに読み易くなっている。

(2) 今回の読解作業で担当者として明確化出来た諸事項

- a) 内藤本は大きく四大分野で構成されている事を明確化した。
農文協版では、個々の項目を逐一細かくフォローしたが、大きく区分ける視点に欠けていたので、全体を見通しづらい記述になっていた。
- b) 京大本と早稲田大学本は同じフォーマット（毎頁ともに1行15文字、1頁7行）で筆写されている上に筆跡が酷似しており、同一人物が写作した可能性が強い。更に、これを基準にすると、内藤本は実質2冊分の内容になっている。
- c) 内藤本は晩期の昌益思想＝四行論で書かれてはいるが、全体として“草稿性”が著しい。だがこの稿本の写作が稿本『自然真営道』の医学諸巻より先に為されたとは言い切れない。（『神医天真』原本の成立期と写本・内藤本の成立期は区別しなければならない。）
- d) 転気の四行と定気の四行の相互逆回と、「感合互性」概念の明確化

転気の四行は左旋の逆回、定気の四行は右旋の順回をして、互いに「感合」し、両者の間に「感合互性」が指定されている事を、図解を添えて明確化した。昌益の四行八気互性論は、「気道互性・味道互性・感合互性」の三点セットで、初めてトータルかつ立体的に理解され得ると言えよう。

(3) 内藤本の記述で新たに明確になった昌益医学の諸事項

医学原論書である事から、『真斎漫筆』のような薬方の細目は載っていないが、重要な基本的事項が書かれている。

- a) 生死判定論：8項目にわたるカテゴリー（身体各部と顔色・呼吸・声音・薬食好悪・発汗・肉脱・脈状・食生）について、病者の生死判定の基準を書き並べている。
- b) 三大病因論：基本的病因として八節気行病因・八味内傷病因・八情気病因の三つを取り上げた。外気と食味のほかに感情・理性の八情神を取り上げているのが注目される。
- c) 真治論：「真治」とは「其の因を明かし、其の互性、其の所用の薬味、其の節の気行を失らざるなり。互性は万に一を失らず、以て治方を加うるのみ。」
- d) 臭気論：四行と三気の組み合わせで、六つの臭気（臊臭・焦臭・腥臭・腐臭・香氣・糞気）を論じた。臭気について纏まった論述をしているのは、この内藤本だけと思われる。
- e) 薬の能毒論：附子は辛熱大毒、人參は甘味補気という通念を例として批判して、薬はすべて当たれば毒にもなり、毒と薬の同一性を強調する。

(4) 内藤本で新たに浮上した諸論点

- a) 「神医天真」の解題：「神医」=昌益か、「神医」=一般的聖医の意か、「神医」=真治の意か、等々。
- b) 「神医天真」諸稿本の原本は昌益自身による稿本か、それとも弟子・後人の編本か。内藤本・早稲田本ともに原本ではなく写本である。京大本も写本であろう。
- c) 脈種の分類に関して：内藤本での脈種の記述と早稲田本での脈論の記述の対照的な違いや、「大・小」の理解の仕方（=大・小を振幅と理解するか、大脈・小脈とするか）
- d) 「今年の五月」「今年の八月」という記述(=第30丁裏→80頁)を原本作成の年月と見なすか、それとも“例えば今年の〇月”というように例示的記述と見なすか。
- e) 情神病と乱神病の関連：情神病は理性感情の過激化がもたらす臓器不全として八節気行推移との関連で論じられている。一方で、昌益は乱神病=諸精神疾患についても『人相巻』や『真斎漫筆』で論じている。後者と臓器の関連、両系統の病種の関連にも関心が向く。

(5) 江戸中期の日食・月食の記録から——「今年の五月・八月」(80頁)の記載に関して

昌益の時代の「5月の日食」・「8月の月食」の記録を抜粋しておく。出典は大崎正次編『近世日本天文史料』(1994；原書房刊)および渡辺敏夫著『近世日本天文学史』(下)(1987；恒星社厚生閣)。

- ・寛保二年五月朔 己未（1742年6月3日） 皆既日食
- ・寛延四年（宝暦元年）五月朔 丁酉（1751年5月25日） 日食二分半（仙台）
- ・宝暦十年五月朔 甲辰（1760年6月13日） 日入帯食

- ・宝暦四年八月十五日 壬戌（1754年10月1日） 皆既月食
- ・宝暦五年八月十五日 丙辰（1755年9月20日） 六分月食

昌益の著作期間に関わる、「5月の日食」「8月の月食」に該当する記録は以上である。同じ年に日食と月食が実現した事例は見当たらなかった。この結果、上掲の期間（1742-1755）で、同じ年の5月と8月に日食・月食が実現した年は無い。そこで筆者は「今年の5月」とは特定の年月＝原本作成の年月ではなく、「例えば或る年の5月」の意味に理解すべきかと考える。「今年の8月」についても同様である。

（6）京大本『神医天真論』（農文協版・昌益全集第14巻に所収）に関して

稿本『真営道』第82-90巻に対応するからといって、単にその要約内容とは言い切れず、独自の内容も一部加わっている可能性も考慮したい。また農文協版では、その注釈が『進退小録』の同じ注釈を参照せよという記述が多くて、閲覧しづらいという技術的欠陥がある。

〈付録〉『良中子神医天真読解』の正誤表

| 頁・行 | 誤 | 正 |
|-----------|-----|---------------------------------|
| 15頁 上13行 | 大苦味 | 小苦味 |
| 15頁 上13行 | 辛味 | 小辛味 |
| 57頁 下11行 | I文字 | 1文字 |
| 57頁 下10行 | 字頁 | 次頁 |
| 64頁 下2行 | 日論 | 日輪 |
| 85頁 下9行 | | （膀胱→腎）←（大腸→肺）←（小腸→心）←（胆→肝） |
| 85頁 下8行 | | （寒冬→小寒）←（涼秋→小涼）←（熱夏→熱蒸）←（温春→小温） |
| 105頁 下14行 | 介した | 解した |

〈番外雑録〉

*農文協・増補版の『良中子神医天真』に関し、筆者は約1/3の分量について抜き取り調査的にフォローした結果、この範囲で7カ所の誤記及び不適切箇所を見出した。単純に外挿すると、全体で21カ所くらいになるかも・・・。誤記を完全になくす事はなかなか難しい。

*筆者は今般の内藤本読解作業を74歳で実現した。これまで昌益の原典注解作業を担当した方々は、みな60歳代半ばまでに終えているので、高齢新記録になろうかと思われる。しかしこれは何ら自慢になる事ではない。ただ、70歳代の高齢者でもやれるという事例にはなつたと言えよう。今後も他者による編注の試みが新たに加わる事を期待したい。